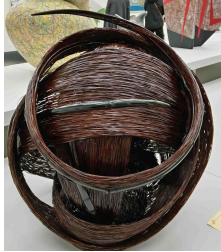




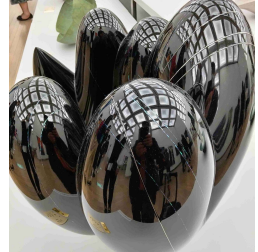
SHIROGANE YOSHI



脈々（門田祐一）



海景（三原捷宏）



ほどける（橋詰里織）

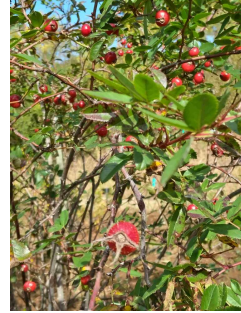
（2025 年日展入選作品：竹工芸、洋画、漆工芸）



草笛の丘の赤松



秋薔薇の刺



秋薔薇の実



浦部神楽（玉とりの舞）



浦部神楽（二匹の狐）

山茶花や静脈青く皮下に透け  
荒寥の景を宥めて小春かな  
枯山に侏儒の乾きし笑ひ声  
一隅のおろそかならず石露の花

璃子（穴まどひ平 21） 高志選  
"（ " ） "  
"（ " ） みち選  
"（ " ） "

令和 7 年（2025）

11 月号

1 6 9 号

定例会(…12月の兼題…師走、柚子)

十二月十九日(金) アビスタ第五会議室 12ゝ15

一月十六(金) アビスタ第三会議室 12ゝ15

二月二十日(金) アビスタ第五会議室 12ゝ15

十一月例会(‘25 11ゝ21兼題…切干、小春) 太字は当日句

光成高志

切干や彼岸に在います母の恩

小春日や夫妻のレリーフバラ七つ (鈴木省三夫妻)

赤松の幹や小春の空に映え

立冬や白薄れゆく朝の月

両手振り差し上げ舞の真似したり (神楽)

団栗や子どろと話して楽しけれ

光みち

小春日や暇そうな山羊寄ってくる

小春日やつんぼの犬の寝てばかり

戸板一枚切干干してある田圃

ベランダに洗濯物と切干と

根菜の刻む音立て冬の入る

青空や照紅葉なるプラタナス

浅野正美

小春日や孫の成長祝ぐ日

鳥居前草履に履き替え七五三

一握り切り干し大根ざるの上

食べ頃を知ってる鳥に柿食われ

日を浴びて旨さ蓄え切り干しよ

ハローウィン仮装姿で登校す

佐々木由紀子

手すりにて暖をとってる小春かな

お日様に顔をむけてる小春かな

大根の細く切られて切干に

ガラス越し日の光あび小春かな

切干の大根煮ている昼さがり

夕暮れて野山は暗し冬に入る

山下寿幸

切干を水に浸して手料理す

小春日を背に受け楽し鳥を彫り

腰丸め鍬の先には芋の秋

かけ声に坂道上がり山車周り

枝しなりたわわに実る柿の色

セーラー服真似た遊び着石路の花

よじ登る都電の記憶味噌おでん

死んだふり半人前の枯蠅螂

おぼつかぬ舟を足場の松手入

山尾万世遊

二の丸に一坊一社白山茶花

169号選句一覽 ○字は選者の頭文字。黒塗りは特選

○切干や彼岸に在います母の恩

小春日や暇そな山羊寄つてくる

○小春日や孫の成長祝こほく日

○手すりにて暖をとつてる小春かな

切干を水に浸して手料理す

セーラー服真似た遊び着石路の花

冬紅葉子らと話して楽しけれ

小春日や夫妻のレリーフバラ七つ

小春日やつんぼの犬の寝てばかり

○鳥居前草履に履き替え七五三

○お日様に顔をむけてる小春かな

小春日を背に受け楽し鳥を彫り

よじ登る都電の記憶味噌おでん

○由ゆ園いんハローウィン仮装姿で登校す

おおくろの森中学校に通うお孫さんの 10.31 ハローウィンでの姿。校

長の発案とか、粋な校長なこと！

赤松の幹や小春の空に映え

○戸板一枚切干干してある田圃

稲刈が終わって戸板一枚に干してある切干大根。何本もの大根を短

冊に切ったことだろうと感心した。

○園いん一握り切り干し大根ざるの上

一握りの切干大根を箆に載せて干している。それをいただくので

す。一握りという細かい描写がいいですね。

大根の細く切られて切干に

○腰丸め鍬の先には芋の秋

死んだふり半人前の枯蠟螂

○夕暮れて野山は暗し冬に入る

○立冬や白薄れゆく朝の月

○○ベランダに洗濯物と切干と

○食べ頃を知つてる鳥に柿食われ

○ガラス越し日の光あび小春かな

○かけ声に坂道上がり山車周り

○おぼつかぬ舟を足場の松手入

普通の状況と変わって余り見かけない松手入れ。足場が舟だときぞ

かし不安定でしょうに。芝離宮など名園の状況でしょうか。

○園いん青空や照紅葉なるプラタナス

○両手振り差し上げ舞の真似したり (神楽)

○園いん根菜の刻む音立て冬の入る

日を浴びて旨さ蓄え切り干しよ

○切干の大根煮ている昼さがり

枝しなりたわわに実る柿の色

○園いん二の丸に一坊一社白山茶花

エッセイ一篇

千住あれこれ

関口恒男

私は戦後間もなく満州から引揚者の子として、南千住の  
物置小屋で生まれた。夜には穴の空いたトタン屋根から星が

見えたという。後に近くに居を構えたが、狭い横町ではす向かいには温泉マークのネオンを掲げた「連れ込み旅館」があった。お世辞にも良い生育環境とは言えなかった。歩いて3分程の所に小学校があり、50人5クラス編制であった。いわゆる「団塊の世代」である。私のクラスには、菓屋の娘、肉屋の息子、医者の息子、材木屋の息子、町工場の娘、畳屋の娘、珠算塾の娘(名簿順)等、多彩な子ども達がいた。一部の児童を除き、多くは貧しい家庭の児童達であった。今思うと、戦後の混乱期であったので児童の転入・転出が多く、仲の良かった友達も引越して行ってしまった。遊びといえど野球であった。南千住には隅田川操車場があり、数知れない貨物列車が終日出入りしていた。当時はまた蒸気機関車が活躍していた。その操車場の脇に小さなスペースがあり、そこが子ども達の野球場であった。時折別の小学校のチームと合合することもあった。喧嘩では旗色が悪かったたので、試合をして野球を楽しんだ。野球は我が軍の方が強かった。少し成長してから分かったことなのだが、南千住には「小塚原刑場」があったという。江戸の3刑場の一つで、鈴木森刑場、大和田刑場と並んで著名な刑場であった。何れも江戸の外れの地である。現在もこの町のメインストリートを「こつ通り」と呼んでいる。現に中学生の頃一部開通した(南千住―仲御徒町)地下鉄日比谷線の工事の時には、江戸時代の頭蓋骨がころころと出土したのだ。こつ通りを少し北に行くと、日光街

道(現在の国道4号線)と交差する所に「素戔嗚尊のお神社」がある。天照大神の弟で英雄神と言われた素戔嗚尊を祀っている。街の人は「お天王様」と呼んで親しんでいる神社である。ここの祭りの神輿も名物の一つである。全国各地にはそれぞれの神輿の流儀があり、ぶつけあったり、高く捧げたり、海に入ったりと、それぞれ特徴がある。ここでは二本の担ぎ棒仕立ての神輿を担ぎながら左右に倒すのである。神輿の屋根の四隅にある「蔵手」を持って向こう側に押し倒す役と、倒れて来た神輿の蔵手を全身の力で受け止めて反対側に押し返す役がいる。その間担ぎ手は必死になつて一方では屈みこみ、一方では海老反りになるのである。この時の押し手や担ぎ手の若い衆の気合、必死になつて耐える表情、躍動する筋肉等は今でも私の脳裏に残っている。この荒っぽく勇壮な南千住の神輿が私は大好きであった。もう一つ各地で異なる物がある。担ぐ時の掛け声である。京都祇園祭では「ほいっとほいっと」である。その他「わっしよい わっしよい」であったり「おいやさ おいやさ」であったりいろいろだが、南千住の神輿はもちろん江戸神輿の「そいや そいや」である。それも「そ」と「す」のあいだの「そいや」なのだ。粋な江戸神輿も担ぎ方が難しいのである。素戔嗚神社を更に北へ進むと、間もなく千住大橋である。隅田川に架かり、南千住と北千住を結ぶ。この橋の歴史も古く、分祿3年(二五九四)に架橋されたという。北千住側の袂には「千住大橋公園」が

あり、そこに「矢立初めの地碑」がる。有名な松尾芭蕉の「奥の細道」にも描かれている地である。芭蕉一行は北千住側で舟を降りて旅に就いたのである。――千じゅと云所にて船をあげれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそぐ。『行春や鳥啼魚の目は泪』是を矢立の初として、行道なをすゝます。――この後およそ5カ月、陸奥から裏日本を巡り、美濃の国大垣までの旅であった。芭蕉46歳の旅立ちである。芭蕉はかねてから西行や李白、杜甫など漂泊の旅を続けながら旅に没した先人に憧れて来た。人生も晩年にさしかかり、矢も楯もたまらず弟子の河合曾良を伴って念願の旅に出たのである。しかし、当時の旅は徒歩、馬、駕籠などしか手段が無かったので、健康でなければ長旅は難しかったと思う。芭蕉は疝氣（胆石か）や痔疾を持つていたという。難儀したと思われる。そのような芭蕉が自ら望んだこととはいえ、不安を抱え、時に都に思いを馳せながら自らを吹っ切った一節が「白河の関」にある。――心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定めぬ。「いかで都へ」と便り求しも断也。――同行の曾良による「曾良旅日記」によれば、白川の関は卯月4月21日（陰暦）通過となっているので、弥生3月27日（陰暦）に江戸を発つてから24日後のことである。芭蕉の心中もそんなに単純ではない。旅の難儀を思い出すのは「尿管」とまえの関」の一節である。芭蕉たちは鳴子温泉を過ぎ、やつとこのことで尿管の関を通り、

日暮れてしまったので、やむなく山中に一宿を求めたのだが、――「蚤虱のみしらみ馬の尿とす枕もと」あるじの云、是より出羽の国に、大山を隔て、道さだかならざれば。道しるべの人を頼て越べきよしを申。さらばと云て、人を頼侍れば、究強の若者、反脇指をよこたえ、櫛の杖を携て、我々が先に立て行。けふこそ必ずあやうきめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして後について行。――芭蕉は体力的にも怪しい上に、疲れてやつとたどりついた宿で、普通であれば深い眠りに就くところを、夜中に蚤や虱に攻められ、うとうとするしかないうちに今度は枕元で馬の放尿の音である。しかも馬のことゆえかなりの音量であつただろう。疲れを癒すどころか、ほとんど眠れない状態で朝を迎えたのであろう。笑い話ではなく、まさに「旅の難儀」である。芭蕉はいろいろな土地で歓迎され、予定より長く逗留することもあつたが、このように一日も早く逃げ出したいような時空もあつたのだった。（2025.11.3）追記：私が通っているスポーツジムで俳句の大先生がいて聞いた。光成高志氏である。別件で紹介された私は、以来光成氏を大先生と呼んでいる。勿論冷やかしなどではない。その光成氏から私の生まれ育った南千住のことを書けと言われた。丁寧に断りしても又書けと言われる。なにしろ毎日ジムでお会いするのだから、辞退するのも大変なことであつた。生まれて30年間通った南千住には愛着がある。少し心が動いた。まともな原稿など書いたことがない私であるが、大先生の熱意にとうとう白旗を挙げて駄文を書いた。――笑覧あれ。尚、テキストは「芭蕉おくのほそ道」付曾良日記「奥細道昔孤抄」（岩

波文庫」による。引用文中の「おどり字」は何か所か原文と異なる表記をした。

## 河口慧海

広谷豊文

河口慧海は1866年、現在の大阪府堺市に生まれます。

その2年後が明治元年ですから、さぞかし動乱の少年時代を過ごしたのでしょう。父親は桶職人で貧しかったので、苦学しながら漢書や英語を勉強します。25歳で得度を受け黄檗宗の住職になりますが、僧侶になつて納得いかない疑問に突き当ります。「宗派や経典によつてどうして教えに差異があるのだろう。多分漢字の経典に間違いがあるからで、原始仏典を調べなければいけない」との思いで、古い仏典が残っているとされるチベット行を決意します。実はこれほとんどない決意です。当時チベットは鎖国していたので、チベット行きは密入国を意味します。1897年明治30年慧海32歳のとき、神戸港からインドに向けて旅立ちます。ネパールとブータンの間の隙間に突き出てチベットと国境を接するインド領があります。シッキムといます。慧海はこの地に隣接するダージリンに約1年間滞在し、チベット語を学び、入国の計画を練ります。当然正規のルートで入国できませんから、ヒマラヤ山系を西にぐるっと大回りして極寒のチベットに踏み入ります。1900年3月のことです。密入国の身では

チベットで日本人は名乗られませんか、道中自分はシナ人のラマ(僧侶)だと偽り、盗賊一味に命を脅されたり、苦難の行程を積み重ね、1901年3月目指す首都ラサに到着し、直ちにセラ大学に入学します。が、今度はシナ人と名乗ることができません。というのはこの大学ではシナ人はシナ人専用の僧舎に入らなければいけません。慧海はシナ語が堪能でなく、シナ人の僧舎に入ればシナ人でないことがすぐにバレてしまうからです。今度は自分はチベット人だと名乗ります。身分を偽つての逗留は多大の緊張の日々を過ごすこととなります。ある日、町を歩いていると親子が泣いています。男の子が喧嘩して腕を脱臼したのです。当時チベットでは脱臼の治療法が知られておらず、脱臼は一生身障者として生きることを意味します。慧海がその場で脱臼を治してやると、皆は驚き、慧海がすごい医者だと思い込みます。それを聞きつけた病人や怪我人が彼を訪ねて来るようになります。慧海はなけなしの知識で処置を施すと、人々は慧海がすごい医者だと信じていますから、病は忽ち癒えていきます。その上慧海は医者ではないと自認していますので、貧しい人から金を受け取らないし、評判は評判を呼び、国中から患者がやってきます。遂に、法王ダライラマ<sup>13</sup>世に招かれ、法王の侍従医になるよう誘われますが、

「自分は仏の道を求めている」と丁重に断ります。そうこうして1年余りの月日が過ぎたとき、慧海のことを日本人だと知っているという人が現れます。当時日清戦争で日本が清に勝利したことで、シナに抑圧されていたチベットの人々は日本にシンパシーを抱いていましたから、告げ口は悪意からではありませんでしたが、慧海にしてみれば身の毛がよだつ恐怖でした。急ぎラサからの脱出を決意します。周辺には、法王から秘密の要件を受けカルカッタへ行くと言いふらし、人夫を1人雇って、集めた経典を馬に積んで、ほぼまっすぐにインドのダージリンをめざして南下します。入国するのに1年以上要しましたが、脱出はそんな悠長なことを言っておれません。何時追手が来るか時間との勝負です。チベットとシッキムの間には五つ関所があつて通り抜けるのに1週間程度かかります。関所で審査に手間取ると、焦る慧海は国中に広がった自分の名声を利用し、「審査に時間がかかるのはやむを得ない。だが私は法王の命令で急いでカルカッタに向かつています。手間取る事情を文書に書いてほしい」といえば、関所の役人は恐れをなして直ちに通行を許可します。7日かかる関所を3日で通過し、無事インドに到達しました。慧海が暫くダージリンに留まっていると、ラサで慧海に関係のあつた人々が投獄され、

厳しい取り調べを受けていると聞き、黙って放置することはできません。見ず知らずのネパール国王に面会を求め、助力の約束を取り付けます。それから約10年後、慧海は鎖国が解けたチベットに再び入り、嘗てお世話になり迷惑を掛けた人々に謝罪します。「チベット旅行記」1904年に日本語版が、1909年には英語版が出版されています。実は時代は帝国主義の時代です。国際的にみると、ロシアと英国は鎖国のチベットを巡って駆け引きをしていたのです。チベットの情報が欲しい英国は直ちに英訳したという事情がありました。さて、「チベット旅行記」は青空文庫でも読むことができますし、「第二回チベット旅行記」も市販されています。この本は冒険旅行記としても面白いし、当時のチベットの風物やチベットとシナとの関係、ロシアや英国との関係を知る上でもとても面白いのです。しかし、何といつても慧海の人間性に感じ入りますし、僅か30歳そこそこの青年の人間力に感服します。なお、持ち帰った経典は東北大学に保管されているとか。

芭蕉の軽み以後 (120) 光成高志

卅日みそか日光山の麓に泊る。あるじの云けるやう、  
「我名を仏五左衛門と云、万よろず正直を旨とする故に、  
人かくは申侍るまゝ、一夜の草の枕も打解とけて休み  
給へ」と云いふ。いかなる仏の濁世塵土じよくせじんどに示

現じげんして、かゝる桑門の乞食順禮ごときの人をたすけ給ふにやとあるじのなす事に心をとめてみるに、唯ただ無智無分別にして、正直偏固の者也。剛毅ごうぎ木訥もくたくぼくとの仁に近きたぐひ、氣稟きりやうきひんの清質尤もつとも尊ぶべし。

漸ようよう日光にはいるが、その前にこの仏五左衛門の項があつて、その性格に触れた右の本文がある。卅日みそかという日付は芭蕉の俳文創作上のフィクション虚構である。曾良日記の3.29の項を読んでいかないとほんとのところはつかめない。曾良日記の原文を載せてもいいが、カタカナ混じりの文であり距離などは尺貫法で書いてあるので、メートル法に馴れた我々にはイメージがすぐ湧かない。そこで曾良日記の行程をたどった「関東の芭蕉」(阿部・高岡S41)を参考に書いてみる。室の八島から壬生みぶへ出るのが3.29である。新暦では5.18。壬生みぶは今の下都賀郡壬生町。東武宇都宮線の壬生駅がある。所々に私事を書くことを許されたい。春に藤を見に足利フラワーパークへ行つたが、これは小山から栃木を通る両毛線に乗って佐野經由で行くのである。佐野を通過するとき、館林經由葛生へ仕事でよく行つたのであれ!と思つた。定年の年、葛生から山を越え、足利へ送られたのを思い出し、足利学校の俳句募集に応募したみちさんが一等賞にな

り十万円の賞金が贈られて来たのを私事のように思い出した。足利は吟行地であつたので他にも思い出があるが、脱線しているので元に戻す。曾良日記は壬生より榆木うぎにれきへ二里、壬生より半道ばかり行きて、吉次の塚が右の方20間(36.4m)ばかり畠中に有りとあるが、その通りに今でもちゃんとある、と先の文献に書かれてある。吉次というのは源義経を奥州へつれて行つたという金売吉次のことで、栗田勇著ではここぞとばかり詳述されている。平治物語・平家物語・源平盛衰記・義経記などに記されて伝説となつていからである。我孫子の柳田國男にも吉次の伝説を載せているほどである。さて榆木より鹿沼へ一里半、と曾良日記にある。その晩鹿沼に泊る。鹿沼は今も鹿沼市。他の文献をみても泊まつた宿は不明である。鹿沼から旧街道は先に紹介した例幣使街道のことであるが、JR日光線に並行して北へ向かう。火バサミヨリ板橋へ廿八丁(一丁は60間、109m余×28丁3000m余)。板橋ヨリ今市へ弐里、今市ヨリ鉢石へ弐里。火バサミは今の文挟ふさきで曾良が文と火を書き誤つたらしい。あるいは当時は火挟と呼ばれていたのかも知れない。文挟宿三十一戸、板橋宿百六戸、今市宿二百三十六戸といわれたのはずっと後の文政年間の記録であるが、遊郭もあり、今市に次いで賑わつた板橋は、今はすっかり



さびれた小部落になっている。板橋から男体山が望める。因みに筑波市のビルからも男体山は望める。今市は今は今市市。旧道の市の入口に「特別史跡特別天然記念物 日光杉並木街道」と標識にある。ここから市街まで樹齢三百年な杉並木が続いている。最も芭蕉の頃は今ほど大きくはなかったであろう。曾良旅日記によると、四月朔日<sup>ついたち</sup>、前夜より小雨降る。終日曇、午の刻<sup>く</sup>（正午前）日光へ着。雨止。つまり日光へ到着したのは四月一日のことで、本文にある卅日<sup>みそか</sup>とあるのは俳文創作上のフィクションである（既述）ことが明らか。既述の文挟、板橋、今市、鉢石は四月一日の午前中に歩いたのである。その足で、江戸浅草の宝聚院清水寺<sup>ほうじゅいんせいすいじ</sup>（天台宗）からあずかった所用の手紙を、養源院へ届けた。養源院は水戸頼房の養母英勝院が妹養源院の菩提のために建立。水戸家参詣の折の宿坊。養源院からは使いの僧を付けてともに大楽院に案内して貰う。大楽院は当時の東照宮別当寺であった。大楽院にはたまたま客があったので、午後三時ごろまで待つて東照宮を拝観した。「関東の芭蕉」によると今養源院の遺跡があつて石垣と両院姉妹の苔むした墓石だけが杉木立の中に残っている。現在の東照宮社務所が昔の大楽院であつたがその建物は残っていない。わずかに左手横にある門がもとの大楽

院の門であつたという。東照宮拝観が終わつてその夜は日光上鉢石の五左衛門という者の方に宿をとる。上鉢石町は神橋に近い門前町である。ところが芭蕉の泊まった宿の亭主、仏五左衛門という者が曲者だった（栗田勇著）、とあるが私は別に曲者だとは思われない。本文を訳してみて考える。「三十日、日光山の麓に泊った。その宿の主が申すには、「私の名は仏五左衛門と申します。万事、正直を旨としておりますゆえ、人はさように申していますので、御懸念なく、ゆつくり今夜はおやすみ下さい」と言う。何という仏がこの濁った現世に姿を現して、こんな僧体の乞食巡礼のよな者を助けられるのかと、主の振舞に氣をつけて見ると、ただひたすら無知・無分別で、正直一点張りの男である。論語に言う剛毅朴訥で仁に近いといった性質で、生来の清らかさはもつとも尊ぶべきである。となるが、私が現代の色眼鏡<sup>いろめがね</sup>を通してみるから普通だと思ふのであろうか。おくのはそ道にこの人物に通ずる者として、先行研究では、宮城野の画工加右衛門と福井の章における等裁をあげている。二人とも一種、俳諧味のある者として芭蕉がその人物像を結構詳しく書いている。その章に行ったら原文も書こうと思うが、ここでは要点のみ簡単にふれておく。宮城野では、あやめ葺く五月四日、仙台に入つて四、五日逗

留。画工加右衛門という聊か心ある者と知り合う。この者はあまり人に知られていない歌枕を一日がかりで案内する。俳人大淀三千風\*の高弟で、俳諧書肆しよしを営んでいる。ここで芭蕉が大淀三千風を知っていたかどうかはわからない。その高弟であつた画工加右衛門が先生である三千風の事をしゃべったに違いないと思う。そこでITであたると、以下の事がわかつたので紹介する。\*三千風の生まれは芭蕉よりも5年早く、死亡は芭蕉よりも13年遅い。故に芭蕉の一生を三千風が覆っている。三千風の出身は三重の松阪で、あの豪商の三井家の分家。一度は家業を継ぐものの、俳諧への情熱を断ちがたく、31歳で家をでて松島に赴き仙台に15年間居住している。仙台では一昼夜で三千句を詠み、これ以降、三千風と名乗る。嶋立庵初代庵主の俳人であるのみならず、謡曲の作者でもあつた。彼が遺したのはその名も「嶋立沢」というもので、曾我十郎・五郎兄弟の敵討ちのヒロインである虎御前を扱っているもの。虎御前は大磯の遊女で、十郎の愛人でした。兄弟が敵討ちを果たした後は、出家して二人を供養したと言われています。俳句では「虎が雨」が夏の季語になっている。十郎の死を悲しんで虎御前が流す涙が雨となって降る、というものです。三千風の句は「嶋たつてなきものを何よぶことり」というもの

です。「たつて」は、「立つ」の連用形、「なきもの」は、鳴かないもの、鳴いていないものを指します。「何よぶことり」は、「何を呼ぶ鳥か?」という意味で、ここでは「鳴くのは何の鳥か?」という問いかけになっています。つまりこの句は、普段は賑やかであるはずの嶋が鳴いていないという状況を切り取り、それを異様とし、静寂の中で感じる不安感や異常さを表現したものです。誓子先生に呼子鳥の句があります。三千風が生きた時代、三井家は江戸に進出し大成功をおさめています。その経営は今でいうところのホールディングカンパニーで、複数の人間で三井家全体を統治し、各家には利益の中から賄い料と呼ばれる生活費を支給していました。今の会社でいえば役員報酬のようなもので、たとえ創業家であつても会社の利益を個人のものにしない、という経営でした。これによつて三井家は長く存在し、明治になつては財閥へとなつていったのでした。三千風にも、家を出たとはいえ三井家から賄い料が支給されたはずで、嶋立庵の中の施設の建築費は彼自身の負担によつたものと考えられます。彼が書いたものからは、金に困つたというのとは見当たりません。そこが芭蕉や蕪村との大きな違いであつた。以上はあるウェブ作者の記事。以下は私の思い出です。手賀沼の蓮見舟に乗つて吟行を年中行事にしていた

ある歳、出船場にて土砂降りの雨に会い舟を出すことが出来ないというので、やむなくそこで句を作り出した。その時、私は虎が雨の季語が浮かび句を作り出した。ある歳、呼子鳥の誓子句碑がある事を知って、松江に仕事で行った時に時間があつたのでその句碑を見に和菓子屋まで行ったことがある。店先の庭に誓子先生の呼子鳥の句碑が蹲っていたのを見た。その時は大淀三千風は知らなかったし、呼子鳥の句も知らなかった。誓子先生はそういう歴史をご存知で句を作られたのだ。芭蕉はこの画工加右衛門が気に入ったらしく、その振舞、話具合申し分なく、松島や塩竈の絵を描いて贈り、且、「紺の染緒をつけたる草鞋わらじ二足」を餞別にくれた。「風流のしれもの痴れ者爰こゝに至りて其その実まことを顕あらわす」と芭蕉は記す。「奥の細道通解」(安政五年(一八五八)の注釈書に「加右衛門愚直にして、風雅に痴情をつくすを賞美し、しれものとは申されしなるべし」とある。私も栗田さん同様同感である。私なんかも世間の理屈から見れば痴れ者であると自覚しているからだ。またもう一人は「福井」の人物で『等裁と云古き隠士いんし有あり』。芭蕉は夕飯の後宿からぶらぶらと散歩に出た。いつの年だったか、十年ほどの昔に江戸に訪ねてきた等裁という者がいた。老さらぼいてあるだろうかと尋ねると、まだなんとか存命だと

いう。市中にひっそり引きこもり、粗末な小屋は夕顔・へちまなどにかくれている。戸をたたくと、「侘しげなる女の出て」、近くに出かけているので「用あらば尋給へ」という。妻であろう。世間ばなれした隠士夫妻の風情は、源氏物語の夕顔を偲ばせ、その家に二夜泊まることになった。菅菰抄に隠士の士について詳しい説明がある。私にはなるほど思えたのでそれを紹介する。士ハ玉篇ニ、古今に通じ然ラザルヲ弁ズル、コレヲ士と謂フ。数ハ一二始マリ、十二終ル。孔子ノ曰、一ヲ推シテ十二合スルヲ士ト曰フ、トアリ。然れば、才芸などあるものを汎く士と云と見たり。(和俗、士の字をさぶらひと訓じて、武士に限るように思うは、和訓の片よりたる故の誤也)。この項の文は両士とも侘び寂びた風情のなかに暖かい情感を漂わせている。加右衛門といい、等裁といい、二人の人物は世俗のなかでも意地をはることなく、市中に隠れながらもいささかの風雅の誠を貫いて爽やかに生きている。自我意識を捨てて、ありのまま生きよとする没我の姿勢なのである。小林秀雄のいう陸に沈む陸沈の生き方である。海に沈むのは易しいが陸に沈むのは難しい。

#### 俳文広場

①曾孫 初めてのひ孫がやってきた。生まれたよ!と孫から知らせがあつた直後からタブレットに写真、動

画を毎日送信してくれる。まだはつきりしない目もと、口もと、大きな泣き声がすぐそばに居るように感じられる。月満ちてすべて整ってこゝを自分の生きる場所と選んで来てくれたんだね。寝顔・泣き顔・大あくび、何をしてても全部可愛い！おでこや口、特に上目づかいの瞳の動きは何でそんなに幼い頃ノ。パパにそっくりなの。二週間もすると頬もふつくとし、二重の目ともはつきりしてきた。パパはほつぺをつゝいて柔らかい感触をいとおしそうに味わっている。寝ながら夢の中でお乳を飲んでいいのか思い出したようにムニムニと口を動かす。そのうちまだ一か月過ぎたばかりだといふのにもう頭を持ち上げようと頑張り出した。「まだ早いよ、あつその態勢はのけぞってしまふよ！」思わず画面に手を出して支えようとしている自分に苦笑する。アグー、ウグーと声を出しながら頭を持ち上げ出来た時はとても嬉しそうだ。頑張ることの快感が既に身体にインプットされているのだろうか。頑張り屋の片鱗が見える。二か月も十日過ぎた頃「初めて声を出して笑ったよ！」と動画が届いた。ママの言葉かけに反応してキラキラのつぶらな瞳で何か言いたげに声をあげて笑っている。こちらでも声を合わせて笑う。同時にこみあげた涙で泣き笑いだ。新米、パパが宝物を抱くようにぎこちなく、でもしつかりと抱っこしている。

それも可愛い！パパは二か月の育児休暇をとった。乳児の世話を最初から経験した事で多くの気付きがあったことだろう。今はスマートフォン・タブレット等の文明の利器があつて遠方に居ても一斉に即座に状況が届く。赤ちゃんの画像を見て親戚一同各々の思いをメッセージし合い成長していく姿を見守っている。お陰でひばあちゃん元気をいっぱいもらっている。のんびりしてはおられない。何か新しいことをはじめよう！（廣本幸恵<sup>10,30</sup>）。

②我孫子の落日 木枯しの吹き荒びし一日、天に一片の雲なき夕べ、二階ベランダにて西方を望むに、遠き富士裾まで見ゆる心の高鳴りを抑えられず。初め日の西に傾くや、富士山、御簾を通して見る如く薄し。日は紅玉の日輪、赤光を放つ。日さらにかたぶくや、富士の姿小さき黒三角に、箱根山、伊豆の連山、丹沢山地、左右に黒黒と連なるが見ゆ。日さらにかたぶき、富士の背にその半円の隠るるや、輪郭くつきりと見えそむる。日の上端薄紅く、富士に懸かる処濃き紅に見ゆ。一二三と数を数ふる間にも似て、日の急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘦せて点となり、たちまちになし。須臾にして富士の雪稜、金光を帯び、恰も富士の裏側に炎のある如く、紅炎の立つるを見る。富士並びに富

士に待する連山を残す西方の天、蒼然として焼けて紅を濃くしつつあり。人の目には見えねども、日の入りたる辺りの空のみ放射状にて朱よりも金となるにや。かかる落日を見るの身は、あたかも涅槃図の中にいる如く心騒ぐを如何ともする能はず。一人ここに佇むも世はこともなく過ぎ行く理なり。中天白き線の伸びゆくは飛行機雲なり。日のさらに落ちたる後は、夕焼け空のどす赤くなり、富土いよいよ黒くなりゆくなり。家々の窓のがらりを降ろす音聞こゆる頃、明星の一つ星となりて輝くに、部屋に入りて常の生活の続くのみなり（光成高志）。

③ 菟蓐こんにやくの里を訪ねて 十一月七日予定通りこんにやく畑を目指して出発した。小春日に恵まれた。高崎駅の上州電鉄乗場はかなり離れていた。還暦祝いに贈られたという赤いウインドブレーカーの正美さんと高志さんと三人の日帰り旅である。上州電鉄の車窓は刈らず仕舞の稔田が多くあり不思議である。そのうち上州福島駅に着いた。三十代の駅員の話は要領を得ず、貸し自転車で二キロ先のこんにやくパークに向かう。正美さんは久しぶりの自転車らしかったが上り坂を難なく乗れた。途中八十歳前後の男性にこんにやく畑を尋ねたら親切に役場のアライさんにケータイしてくれたが、昼休み

で不在、受付に通じて、そこを訪ねるように言われ、役場へむかった。地名は甘楽<sup>かんら</sup>町という。受付の高橋さんが迎えてくれ、役場から見える丘の上にながればこんにやく畑があると教えられた。とりあえず直ぐ裏のこんにやくパークに行き、無料のこんにやくバイキングでお腹を満たした。まさにこんにやく腹。観光バスが5台も止まっており、パーク内は混雑。工場見学後、丘の上へ上がると山裾まで満目のこんにやく畑。二ヶ所の畑で蹲って黙々と掘り起こされた菟蓐芋の選別作業をしていた。俳句を作りに来ました、中へ入ってよろしいですか、と断る。話して分かったことは、午前中に持ち帰る分をトラクターで掘り、午後を選別するという。二組とも八十代の老夫婦である。この畑はみかん程の大きさで一年玉といって種芋ばかり。種芋は来年春に植え付ける。不良品はこんにやくにするという。三年玉が完成なので、三年かかる。こんにやくパークの入口には三十キロという臼ほどの五年玉が展示されていた。畑からは西に妙義山その奥に浅間山が見える。午後三時ともなれば上州の空つ風らしい冷たい風が吹きだした。空つ風が強くなる師走には、風除けになる山裾の畑の菟蓐を掘るのだという。行き当たりばったりの探訪であつたがおおむね念願は果た

せた。「夫婦して日暮れまで選べる蒔蕪玉」(光みち

2014・11.7)。

お便り広場

光成様いつもありがとうございます。「白金葎」168号を18部をお送り致します。すっかりとつぷり秋ですね。今日お昼休憩室は薪ストーブがついていました。みちさんによろしくお伝えください(10.20 木戸敦子)。前略 夏からすぐに冬になったような今頃です。今日は寒さの準備をしました(冬支度)。高価なリングほとんどにありがとうございました。箱をあけると新鮮ななんと云へないリングの匂い幸福な気分でした。仏様に供へました。夕ご飯の後伸君と二人笑顔でおいしいと云いながら頂きました。手間もかかり敏子さんも忙しくしておられるのにほんとうに心づかいありがとうございます。感謝しかありません。お身体に気をつけて下さいませ。(幸子 10.24) 寒さを感じる朝です。する事もなくなっても自分では出来ないと思いたくない、そんな日で毎日が過ぎて行きます。白金葎読ませてもらいました。ありがとうございます。私達の忘れる事の出来ない祖父を思い出しました。父亡き後私達を助けてくれた明治四年生まれの祖父です。この間散歩していたら知らない同年配の女の人が「きれいな白髪ですね」と話しかけられ道ばたで二人で高齢で困りますね。若い人の云う通りに生活しなければ生きられない、自分の意見は通らない、云えな

いと心の内をぶち明け笑ったり励ましたりして気を付けてねと別れました。近所の人も同年配の人が多く何時も昔話にどこの病院が良いとか年金がどうのとか時々呼ばれ話の中に入って日を過ごす事もあります。俳句はなかく出来ません。言葉のむずかしさ頭をひねってもだめです。高齢ですから無理をせずに二人でがんばって下さい。(10.31 幸子) リングすごくおいしかったです。うれしかったです。

(俳句は頭をひねらなくても出来ず。目で見たまを紙に書いて置き、後で五七五に書けばそれが俳句です。鉛筆と小さいノート、なければ紙切れに穴をあけて紐を通し腰にぶら下げて散歩するのです。やって見てください。五七五にするのが面倒ならば、その前のメモを送って下されば赤を入れて郵送します。妹の峯子にも云って下さい。)

急に秋を通り越えて冬が訪れた感じで寒くなつて参りました。お変わりございませんか。昨日の雨の中では気付かなかった金木犀の香りが今朝は青空のもとでふくよかに香っています。例年だと十月の初めには開花するのですが、今年は十一月に入つてようやく橙色の花を見ることが出来ました。やはりほつと心安らぎます。地球温暖化がこんなところにも表れるのですね。先日は「白金葎」十月号をお送り頂きありがとうございました。個人的な体験が題材になつてしまっています。これは俳詩とは言えないかもしれないと思いつく書いてみました。よろしくお願いします(11.6 幸恵)。(末文のところ、俳詩ではなく俳文と考えて下さい。俳文は俳句にかかわるすべての文章をいいます。では俳句とは何かという

人によつて作り方も考えも違います。この白金葎という俳誌を創刊した時の私の言葉を少し長いですが、写して示します。創刊の言葉  
今回の東日本大震災のことを思わざるを得ない。芭蕉没年は元禄七年、九年後の元禄十六年一月に赤穂義士が皆亡くなって、その年の暮に元禄大地震が起った。大正十一年に森鷗外が亡くなって一年あまりで、関東大地震が起った。山口誓子先生が亡くなって、一年未満で阪神淡路大震災に見舞われた。今回の地震は、斎藤嘉久先生が亡くなって三ヶ月後のことである。そして、白金葎創刊句会の一週間前のことであった。M9.0という未経験の巨大地震である。日本列島は青い美しい島国であるが、天災に見舞われ続けている。それが大和心を育んできたのです。自然をありのまま従容と受容して、造化に従いて四時を友として生活して行きたく思います。日々の生活を大切に、その中に季節を感じつつ、季節感を俳句に定着させたく思います。その際、やはり誓子先生の言葉が脳裏を離れません。『自然の物を写生し、物と物との結合を把握し、その物を客観描写によつて、季節感を詠う。これが、芭蕉から現代に伝わった正統俳句である。』というものである。その季節感、生活感を共有する場として、この白金葎なる小冊子を作成します。そして出来れば、自然のありふれた素材に深い意味を見出し、さらに、その物と季語との新たな関係を見出して、季語の本意に格上げする努力をしたいと存じます。これが私の創刊の言葉です。来年、再来年、五年後に私がどのように思っているか、私自身を楽しみに日々明るく楽しく俳句と共に生活して行こうと思っております(2011.18)。今読むとずいぶん気合が入っていると思いますがそれが当時の私の思いでした。今も思いは変わりません。ただ、声をかけて同人になって頂いた方が年配の方ばかりであった所為で今は鬼籍に入られ、俳友が少なくなってきました。五年ごとに刊行する記念誌では随筆<sup>ナッセイ</sup>・吟行句・兼題句撰集も載せ

ました。今年からそれに俳文も加えようと思つています。俳句は季語という自然のあらゆるものを包摂する歳時記があり、それを踏まえて文章を書けばそれが俳文になります。自然には人間も無論含まれます。個人的な体験も無論包摂されます。季語には時候天文地理人事宗教動物植物という分野があり、私達の生活はその中で行っていると言っても言い過ぎではありません。冒頭のところの掲載可否は私が判断しますので気にせず書いて下さい高志。いつもお世話になります。11月の、句会には誠に申し訳有りますが、病氣為、欠席させて頂きます。宜しく願います。駄作を下記の通り投句させて頂きます。皆さん一時を楽しんでください。(中略)追伸、最後に、俳句の楽しみ方にご指導頂きました、御兩人に、心から感謝申し上げます。俳句の会から脱会させて頂きます。ありがとう御座いました。今後のお付き合ひ宜しく。句会の皆さんの活躍を祈願します。病院から。以上(山寿幸)。令和七年十一月も半ば過ぎました。自分の事で毎日が一杯なのに総理大臣が変われば朝食後お昼迄新聞読むのにと気を費やしてしまっています。銀座俳句の投句は毎月五句は何とか出しますが今年是不調でしたが十月句に秀逸五人の中に入り図書カード一千円也を頂きました。「咲き凋み薜色を違へたる」(璃子)。白金葎十月号俳文広場楽しく拝読。目高の子いつの間にか生れたり。メダカも種類いろいろありとは友人から聞いていましたが、結構飼う方ありとはびっくりでした。カマキリをみちさんが飼われたとはびっくり。以下次号へ(山璃子)。

# 我孫子日記

	10/17	句会
	10/19	
*1	浦部	神楽
	10/23	馬倶楽部
	10/25	
*2	布施	弁天
	10/31	
*3	日展	
	11/1	
*4	バードフェス	
	11/2	
	IF (イ・フ・エ)	
	11/3	
	ビデオ通話	
	11/9	
*5	梅の花	
	11/12	
*6	草ぶえの丘	
	11/15	
*7	駅前クリニック	
	11/19	
*8	岡田家の柿	
	11/21	
	句会	

\*金槌と劍持て舞ふ鍛冶の舞

氏子らは舞に背を向けビール飲む

鈿女<sup>うずめ</sup>の舞両手に柿もて舞へり

神楽笛聞こゆる森へ急ぎたり(みち)

鉢巻の氏子真似して神楽舞ふ(〃)

宵迫る鬼を懲らしむ神楽殿(〃)

\*2 コスモスの丈のまちまち色とりどり

コスモスの色臙脂ピンク橙黄

\*3 地下鉄の白秋切る音響きをり

日展や竹工芸のちらほらと

漆工芸つるく灯り映りゐる

\*4 鶚<sup>ミサゴ</sup>見る頭の白く羽根も白

バードフェスチバル双眼鏡のずらり立つ(みち)

\*5 生垣の柵密によく匂ふ

湯葉豆腐銀婚式が近いとや

\*6 落葉道侵入禁止一の文字

紅白の混成この山茶花は

乙姫てふ花と蕾の秋薔薇

新雪てふ枝の刺々秋薔薇

花笠てふ八重の真紅の秋薔薇

秋薔薇花はなけれど真紅の実

秋薔薇棘のアーチを潜りたり(みち)

秋薔薇園バラの実数多輝けり(〃)

\*7 冬晴や足蹴り自転車の子に抜かれ

\*8 皮を剥く五百グラムの蜂屋柿

蜂屋柿真つ赤に並べ干されあり

落花生の株裏返し日に当てる

編集後記

今月は畏友広谷さんの提案にて白金蔭をWEBに載

せる作業をしています。そろそろまとめなくてはと

思っていたので、時宜を得た申し出に感謝していま

す。WEBはWorld Wide Webの略称です。Webは蜘蛛の

巣ですから世界規模の蜘蛛の巣という意味になります。非常

に広い世界ですからこれから大変な作業と思いますが続け

ます。

白金蔭11月号(通巻169号)誌代一部千五百円(年会費一万五千

円)郵便振込口座一〇五二一〇四二二六一名義シロガネヨ

シ令和七年11月23日発行編集発行人光成高志発行所〒270-1119 我

孫子市南新木2-14-17 光成方 投句先…メール又はライン

印刷製本…喜怒哀楽書房〒950-0801 新潟市東区津島屋七二九。表紙の題字は嘉悦羊三&1122の白金蔭&日展作品&秋薔薇&浦部神楽&璃子さんの句集「穴まどび」よりの選句